長岡京市正木彰家文書の詩稿について

新稲法子

京都府長岡京市教育委員会が所蔵している正木彰家文書は、長岡京市の歴史を知る上で欠かせない資料であるが、その中には正木安左衛門（号聳山）の所有していた詩稿が含まれている。正木彰家文書そのものについては既に目録も備わっており、近代以前の資料のほとんどは今日影印で見ることができる。しかし詩稿に関しては、整理はされているものの、未だその内容を取り上げられるには至っていない。

詩稿の大半は安左衛門が所属していた詩社のものである。一つの詩社のこれだけの分量の詩稿がまとまった形で保存されていることは、そうあることではない。これらの詩稿は、明治期における関西の詩社の活動が具体的にどのようなものであったのかを伝える資料として、研究に資するところが大きいと考える。本稿は正木彰家文書のうち、その詩稿の一部について報告するものである。

1　資料の概要

正木彰家文書は現在、長岡京市教育部生涯学習課文化財係が管理し一般に公開されている(注1)。

詩稿はその他の資料とともに、1-7-1から1-7-26までの請求番号で整理されているが、数種を一綴として同じ番号が割り振られているので、請求番号1-7-1から1-7-4（1-7-2を除く）の二十六の詩稿について私に番号を付け、情報を整理した（表1～表3、図1～図5）。1-7-3①はこんにゃく版、他は全て写本である。なお、1-7-2『日謄録』は安左衛門の衆議院議員としての日記であるので、ここでは省略する。

2　正木聳山と共研嗈社・嚶求嗈社

正木彰家文書の詩稿の所有者であった正木安左衛門（一八四〇～一九一三）について記しておこう(注2)。天保十一年に山城国乙訓郡今里村（現在の京都府長岡京市今里）に生まれた安左衛門は、明治六年三十四歳の時に今里村戸長となったのを始めとし、同九年には乙訓郡第三区の区長、乙訓郡の地租改正総代、同十五年には乙訓郡府会議員を勤め、同二十五年には乙訓から初めて衆議院選挙に当選するなど、政治家として活躍した人物である。

安左衛門は聳山（以下、聳山と記す）と号し、若い頃から学問好きの人物として知られていた。幼少の頃、長法寺村の宇田退蔵から漢学を学び、元治二年、二十六歳の時からは京都の江馬天江に詩文を学んだ。また明治四年京都の山本竜蔵に法学を学び、その前後には淀の中島静甫に漢籍を、亀岡の北村竜象に政治経済を学んでいる。大正二年没。

聳山は勝竜寺村の中山弥一郎（号先春）、井ノ内の森本和三郎（号桑泉）らと共に漢詩を愛好していた。詩社の名前は地元では共研嗈社が知られているが、正木彰家文書の詩稿には「嚶求嗈社」と記されているものもある。

共研嗈社の「共研」は共に研鑽するという意味であろう。嚶求嗈社の「嚶求」は『詩経』小雅「伐木」を出典とすると考えられる。

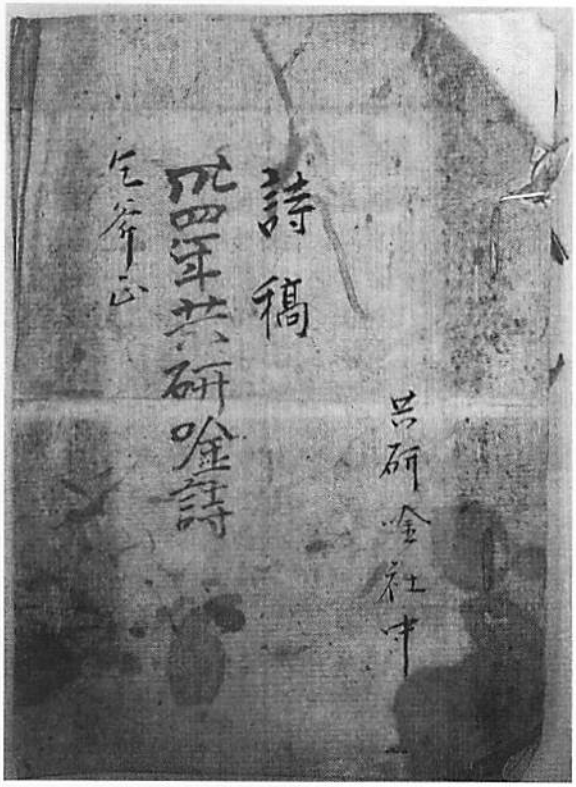
伐木丁丁　鳥鳴嚶嚶　木を伐ること丁丁（とうとう）たり　鳥の鳴くこと嚶嚶（おうおう）たり

出自幽谷　遷于喬木　幽谷より出でて　喬木に遷（のぼ）る
嚶其鳴矣　求其友聲　嚶として其れ鳴く　其の友を求むる声あり
相彼鳥矣　猶求友聲　彼の鳥を相（み）るにも　猶友を求むる声あり
矧伊人矣　不求友生　矧（いわ）んや伊（こ）の人　友生を求めざらんや
神之聽之　終和且平　神の之を聴いて　終に和らぎ且つ平らかならん

鳥さえ嚶嚶と鳴いて友を求める、我々も共に高め合う友を求めようという意が込められている。共研、嚶求ともに仲間と切磋琢磨していこうという新時代の若者の意気込みが感じられる語である。

［図1］1-7-1　共研嗈社詩稿

［図２］１－７－３　共研唫社詩稿



［図３］１－７－４　共研唫社詩稿

３　指導に当たった人物（注３）

批点の施された詩稿の署名から、共研唫社の指導に当たっていた人物として、まず宇田栗園（一八二六～一九〇一）を挙げることができる。宇田栗園は名は淵、京都の人、医学・漢学を修め、梁川星巌に詩文を学んだ。歌人として知られ、岩倉具視とも親しく交際した勤王家でもある。著書に『栗迺花』がある。明治三十四年没。

聳山が最初に漢学を学んだのは長法寺村の宇田退蔵であることは先述した。「向日里人物志」には四名の宇田姓の人物が記載されている。儒医であり、教養人である彼らが乙訓地域の文化に与えた影響は大きかったと考えられる。

長岡京には長法寺村・神足村に宇田家があり、宇田栗園と同族であるという。栗園が共研唫社の添削指導を行ったのは、そういう繋がりがあったことも理由の一つであろう。

江馬天江（一八二五～一九〇一）もまた共研唫社の指導に当たっていた。江馬天江は名は欽または聖欽、字は永弼、通称は俊吉。近江の人、下坂篁斎の六男として生まれ、江馬榴園の養子となり、江馬姓を名乗った。緒方洪庵に洋学を、梁川星巌に詩文を学んだ。慶応二年太政官史官に任ぜられたが明治二年に辞し、京都で私塾を開いた。同十七年には小堀遠州が作庭した退享園に隠棲し、多くの文人と交遊した。著書に『賞心贅録』、『古詩声譜』、『退享園詩鈔』など。天江は宇田栗園と同じく明治三十四年に亡くなっているから、三十三年の詩稿である１－７－３⑤は最晩年の添削であるといえる。１－７－１⑨⑩、そしておそらくその筆跡が⑨⑩と酷似していることか

ら⑧は江馬天江の詩稿である(注4)。

栗園と天江は小川果斎が明治十八年から刊行した『熙朝風雅』に於いてもともに評点者を務めている。

京大坂間の往来に極めて便利な位置にあり、現在の京都市伏見区・西京区に隣接する乙訓地域は、文化的にはほとんど京都に属する。

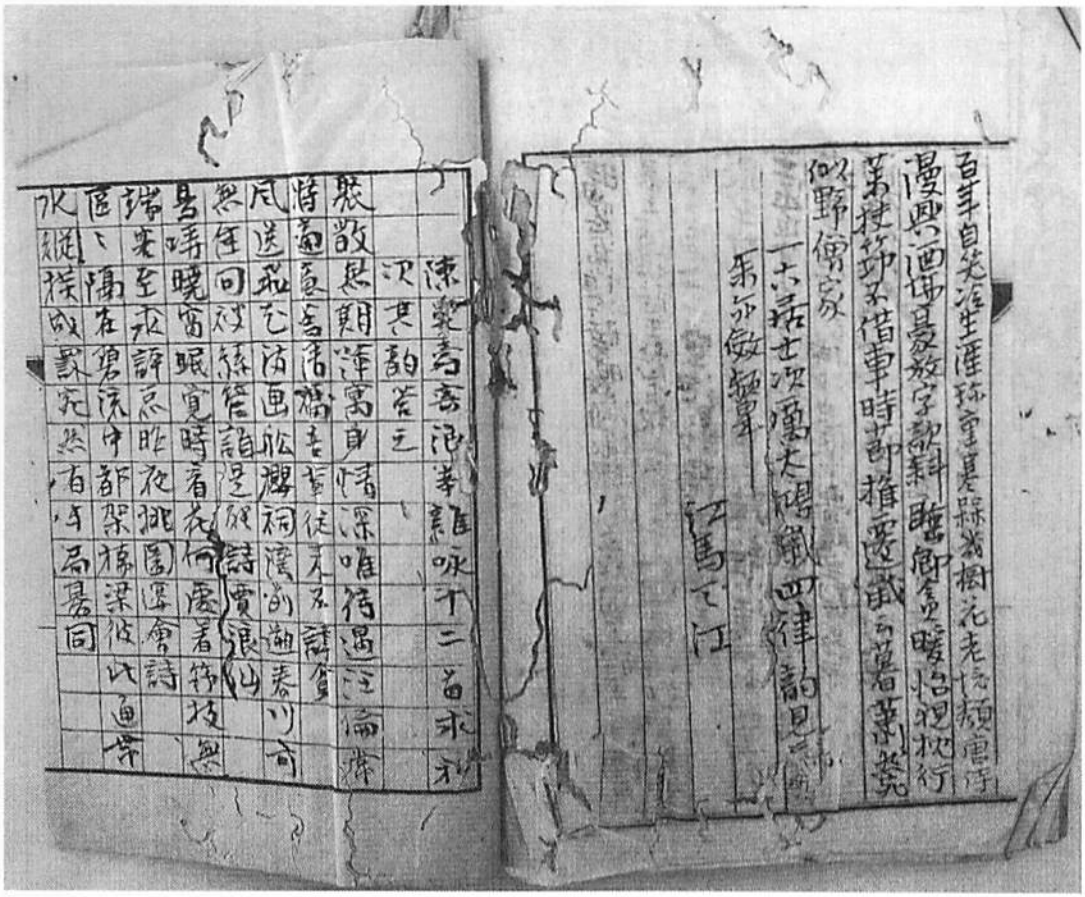
乙訓地域在住の宇田家の人々はみな京都の古義堂で学んだ。また、新島襄の同志社大学設立の運動に際しては、当時府議であった正木安左衛門と奥海印寺村の前府議多貝籐右衛門も発起人にも名を連ねた。このようにほとんど在京と同じ生活圏にある乙訓の共研唫社が、宇田栗園や江馬天江といった当時の京都を代表する文化人に添削を乞うたのもごく自然なことと考えられる。

京都の強い影響を受ける一方で、乙訓は独自の古い歴史を有する地域でもあった。長岡天満宮や浄土宗西山派の総本山である光明寺などには京都からも訪れる人が絶えなかった。共研唫社の詩稿にはこれら地元の名所旧跡を詠んだ作品も多く見られ、詩人たちが京都の文化を一方的に享受するだけでなく、自分たちの地域に誇りを持って活動していたことが窺える。

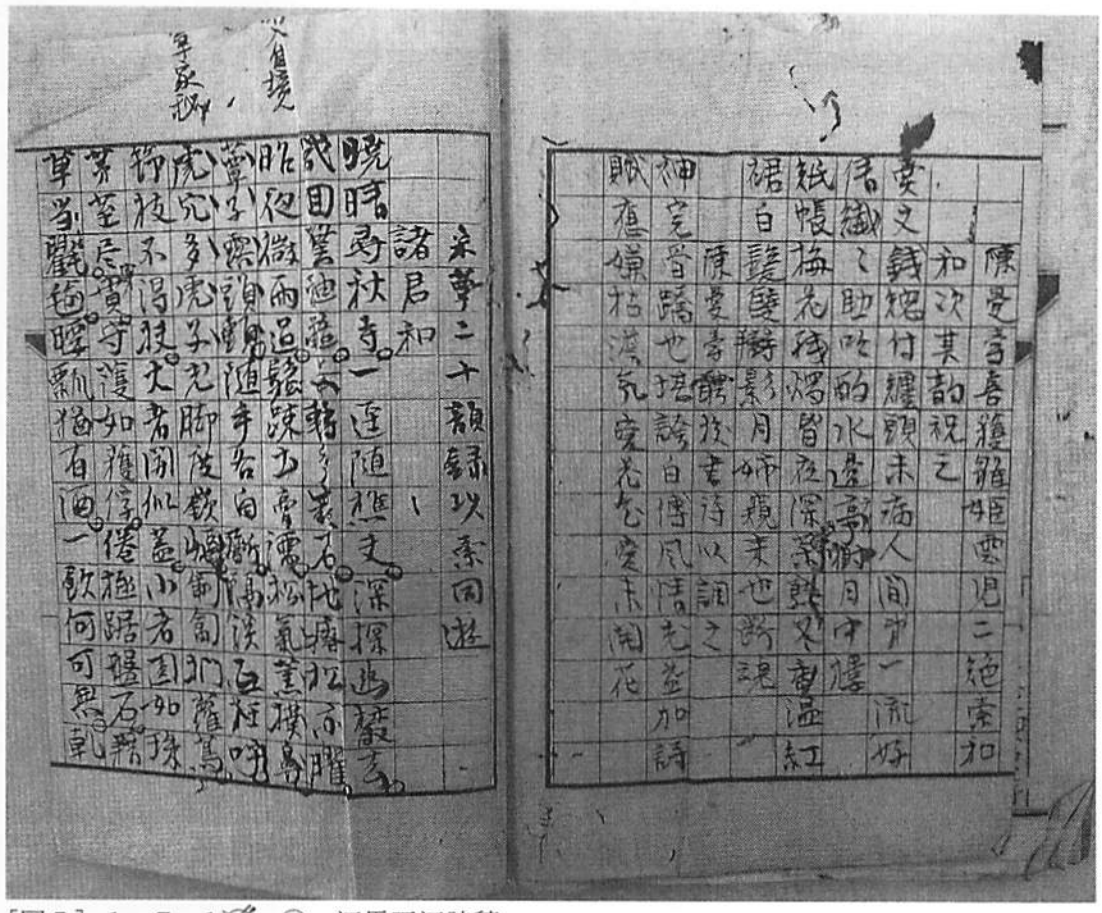
初期の共研唫社の指導に当たった宇田栗園、江馬天江に続き、明治三十年代の詩稿を主として添削したのは中島静甫という人物である。

1-7-4⑤を添削した久保雅友(一八六一～?)は、二松学舎出身、明治三十三年に新潟中学校から、大阪府第一中学校(現在の大阪府立北野高校)に転任、四十一年まで国語漢文の教鞭を執っていた。

この他、1-7-4⑥の添削者の「桂邨主人彝」は櫻井玄彝であると思われる。明治四十一年に上梓された『熙春堂詩鈔』によると、医者で詩を善くし、咸宜園で学び都講となった。添削時には京都在住であった。



[図4] 1-7-1⑨, ⑩ 江馬天江詩稿



［図5］1-7-1⑩　江馬天江詩稿

4　添削指導の実態

請求番号1-7-1③からは、共研唫社の詩人たちが宇田栗園から具体的にどのように添削を受けていたかが窺われる。この詩稿の表紙には「共研唫社　匿名各拝乞」とあり、一丁目冒頭には「栗園先生批点後予付各号（栗園先生批点の後、予、各号を付す）　犬川生再拝」という書き込みがある。つまり、栗園は作者がわからない状態で添削し、作者の号は添削後に犬川によって書き込まれたということになる。犬川は岡本宣光、犬川は号で共研吟社において主要なメンバーの一人である。栗園との詩稿のやりとりなど世話役を買って出ていたのであろう。

1-7-3⑧には脱字があり、江馬天江が「林西」と書き込んだ上で「此等二字脱」と記している。その横に別の手で「前渓トアリシヲ記者脱記セシヲ謝ス」と記してあるところから、各人の詠草は取りまとめられた上で清書されていたことがわかる。

添削を依頼する際に名前を伏せる方式をとったのは、各人の社会的な立場と無関係に純粋に詩のみを見てもらうための配慮であったと考えられる。

興味深いことは、指導者によって添削の詳しさに差が見られることである。各作品は添削されるだけではなく、しばしば上欄に天地人や甲乙丙の印で評価を書き加えられている。1-7-3⑦は天地人で評価が示されているが、天は天甲・天乙・天丙、地は地乙に分けられているなどその評価は細かい。1-7-3③④の江馬天江添削分は冒頭に「朱点ノ数ヲ以テ甲乙丙ノ優劣ヲ乞」とあり、、で評価が

〔表１〕【請求番号１－７－１】 共研唸社詩稿（和歌を含む） 寸法 24.8 × 17.8 センチ（最大）
（一綴。便宜上、最大のものを示した。以下同じ。）

	表紙	年月日	丁数	批閲者	添削記号など	備考
①	大政／伏乞／共研唸社各押	戊寅（明治十一年）三月	四丁	宇田栗園（「戊寅三月栗園主人宇田栗園批」）	点	
②	なし	庚辰（明治十三年）歳除前一日	四丁	宇田栗園（「庚辰歳除前日栗園主人宇田栗園」）		柱「乙副郡第四組戸長役場」。
③	大政／共研唸社／匿名各押乞	戊寅三月	五丁	宇田栗園（「戊寅三月栗園主人宇田栗園批」）		犬川の書き込みあり。用紙欄外に「筧窓房
④	伏乞／大政／共研唸社諸子／再押	庚辰除夕	六丁	宇田栗園		柱「共研唸社」。
⑤	なし		五丁			柱「萬松閣蔵梓」。欄外「明治第十四年辛己天中節八山世外碧涛生刀」。
⑥	なし		三丁			「大津遊歩記」から始まる大津遠帆楼に於ける酒宴での作。漢詩と和歌。添削なし。
⑦	なし		十三丁			和歌。「逗月」の名あり。
⑧	なし		四丁			⑤と同じ用紙。江馬天江の詩稿か。
⑨	なし（江馬天江詩稿）		一丁			末尾に「一六居士…／余亦傚翠／江馬天江」。
⑩	なし（江馬天江詩稿）	庚辰	二丁			「江馬欽初稿／庚辰十月念四　林美妄批多跟」とある。上部裁断されている。

〔表２〕【請求番号１－７－３】 共研唸社詩稿　寸法 28.7 × 20.0 センチ（最大）

	表紙	年月日	丁数	批閲者	添削記号など	備考
①	表紙なし、「中島□□（虫損、静甫か）先生評」。		三丁	中島静甫	甲乙丙	こんにゃく版。
②	大政／共研唸社諸子押乞		六丁	江馬天江（江馬欽批）		
③	表紙なし、「共研唸社詩稿」。		二丁	江馬天江（　〃　）		冒頭に「朱点ノ数ヲ以テ甲乙丙ノ優劣ヲ乞」とある。
④	表紙なし、「乙副共研吟社詩稿」		三丁	署名なし、江馬天江か。		冒頭に「朱点ノ数ヲ以テ甲乙丙ノ優劣ヲ乞」とある。
⑤	「明治卅三年八月／共研唸社々員再押／乞叱正」	明治三十三年	四丁	江馬天江（江馬天江批）		末尾に「明治卅三年八月／共研唸社々員再押／乞叱正」とある。
⑥	表紙なし、冒頭欄外に「中嶋静甫先生添削」。		六丁	中島静甫	一～四	
⑦	「庚子十二月詩稿／共研吟社」	庚子（明治三十三年）十二月	七丁	署名なし	天地人と甲乙丙	柱に「自琢堂」
⑧	「共研唸社吟稿」		九丁	江馬天江	甲乙丙	末尾に「伏乞／右大政」。

〔表３〕【請求番号１－７－４】 共研唸社詩稿　寸法 25.7 × 18.3 センチ（最大）

	表紙	年月日	丁数	批閲者	添削記号など	備考
①	「共研唸社中／詩稿／卅四年共研唸詩／乞斧正」	明治三十四年	六丁	署名なし	天地人	評者の書き込み多し。裏表紙に「研客閲了」とあり。
②	「詩稿／伏乞／斧正／共研吟社」		七丁	署名なし	天地人	裏表紙に「研客閲了」とあり。
③	表紙・裏表紙は別紙、「明治辛丑八月／共研吟社詩稿／大正　伏乞」	明治三十四年	八丁	署名なし	天地人	評者の書き込み多し。柱に「自琢堂」とあるのを消している
④	「中島静甫先生閲／共研唸社詩稿／伏乞大政」		五丁	中島静甫	天地人	回覧の書き込みあり。
⑤	「共研唸社詩稿／会主伏乞／大政」	明治三十四年十一月	六丁	久保雅友（久保雅友批）		回覧の書き込みあり。
⑥	「共研唸社詩稿」	明治三十四年冬	六丁	櫻井玄蕉	甲乙丙	（「辛丑之冬初　桂郁主人鼎批」）
⑦	「共研唸社詩稿」		五丁	署名なし	甲乙丙	（「辛丑　之冬初　桂郁主人鼎批」）
⑧	「共研唸社　諸子押乞／大政」		四丁	署名なし	甲乙	

中嶋静甫（1-7-5②による）

長法寺宇田家　郁太郎（研谷）M38没
添削をしたのではないか。他の人物も
(二)で訂正

示されている。共研嗌社側が天江にも他の添削者同様に評価の記入を求めたことがわかる。

1-7-4④⑤には添削後の詩稿を回覧した詩人名と日付が書き込まれているが、1-7-3①のこんにゃく版は各詩人に配布されたのであろう。

共研嗌社では単にできあがった詩の添削を指導者に仰ぐだけでなく、詩社名のごとく共に詩の出来を競い合い、研鑽していたことが窺える。

5　おわりに

以上、正木彰家文書の詩稿を紹介し一部の概要を述べた。

今回取り上げた詩稿では、当時の京都を代表する文人である宇田栗園や江馬天江が作詩指導に当たっていたが、このことは乙訓地域が作詩を学ぶ上で京都の中心部と遜色ない環境にあったことを示している。

また、詩稿からは世話人が取りまとめ匿名で批正を乞い、評価を回覧するという、当時の詩社の活動の実態を知ることができた。

これらの共研嗌社の詩稿以外にも、嚶求嗌社に関係する資料、例えば「卅五年五月十日ヨリ卅六年壱月卅日迄　嚶求嗌社紀事」（嚶求番号1-7-8）と題され、参加者や席題・宿題などが克明に記録されている一冊など、まだまだ詳細な調査が俟たれる資料が存在する。正木聳山旧蔵書も長岡京市に寄贈されており、詩稿と合わせて聳山の教養の背景を知ることができると期待される。今後も調査を続ける予定であるが、多くの研究者の調査・利用を願っている。

俳諧の分野に於いては既に地方俳壇の研究が進んでいるが、近世・近代の漢詩に関しても、研究対象の範囲は地方漢詩壇をも精査する段階に入りつつある。正木彰家文書のすべての詩稿について精査することは、明治期の京都近郊の詩社の実態を明らかにする上で、きわめて有益であるといえるだろう。

注

(1) 歴史資料の公開について（長岡京市）長岡京市教育部生涯学習課（図書館内）文化財係　http://www.city.nagaokakyo.lg.jp/0000001445.html

(2) 長岡京市史編さん委員会編『長岡京市史』本文篇二　平成九年刊、百瀬ちどり「文化のネットワークと心の絆　正木聳山の生涯と今里正木彰家文書」（古典の日制定記念文化講演会、平成二十五年一月二十日）配布資料など参照。

(3) 長岡京市史編さん委員会編『長岡京市史』本文篇二　平成九年刊、岡本黄石『明治漢詩文集』（明治文学全集62）、筑摩書房、昭和五十八年、大阪府立北野高等学校校史編纂委員会『北野百年史―欧学校から北野高校まで―』北野百年史刊行会、昭和四十八年など参照。

(4) 図4、図5。

（にいな　のりこ／佛教大学・非）

編集後記

○今号に掲載した論考は、計8本。うち4本が資料紹介。江戸初期の奈良連歌師の紀行文（川崎稿）、非蔵人歌人経亮の歌文（一戸稿）、小沢蘆庵自筆書簡（近衛稿）、明治の京都詩社の詩稿（新稲稿）など、時代・ジャンルともに多岐にわたる。高松稿は、宣長・秋成らに学んだ和学者林鮒主の年譜稿。

○山崎稿は、『本朝孝子伝』地蔵寺本を諸本と比較・考察したもの。正木稿は、『男色大鑑』における西鶴の演出や工夫を考察したもの。福田稿は、栗田樹堂の煎茶趣味の上方由来説を家系や人脈を手がかりに考証したもの。

○前号に始まった連載「上方文藝への招待」には、木越氏の寄稿をいただいた。中国ハルピン工業大学で開催されたシンポジアムの模様を生々しく伝えている。

○十号を迎えて感慨を禁じ得ない。創刊時、上方に特化した研究誌でやっていけるのかという不安はあったが、執筆会員が意欲的に取り組み、その結果投稿が少なすぎるという危機も特になかったし、多くの皆様の激励をありがたく頂戴しながら、順調に歩んでこれた。合評会も途絶えることなく続いており、研究交流の場としても機能していると思う。近年、国文学商業誌の相次いでの休刊があったが、研究同人誌は、『江戸風雅』の創刊、『雅俗』の復刊など、むしろ元気である。本誌も、これまで通り、地道にがんばっていきたいと思う。

○「上方文藝研究」の購読会員・執筆会員（同人）になりたい方は、下記事務局まで郵便またはメールでお申し込み（お問い合わせ）下さい。購読会員の年会費は千円です。年一回刊行の本誌一部（送料は当会負担）をお送りいたします。執筆会員は年会費六千円（学生は二千円）で、本誌二部を配布します。なお、執筆される場合、査読により原稿の採否を決定します。詳細は下記連絡先までお気軽にお問い合わせ下さい。

（飯倉・康）

上方文藝研究の会　同人（五十音順）

浅田　徹　天野　聡一　有澤　知世　飯倉　洋一　一戸　渉　伊藤　達氏
今井　亮輔　内田　宗一　海野　圭介　大橋　正叔　岡島　昭浩　尾崎　千佳
加藤　弓枝　神谷　勝広　川崎佐知子　川崎　剛志　川端　咲子　神作　研一
康　盛国　木越　俊介　衣笠　泉　金　昌哲　合山林太郎　近衛　典子
島津　忠夫　神明あさ子　菅　宗次　高橋　清久　高橋　雅彦　高松　亮太
富田志津子　仲　沙織　永野　仁　新稲　法子　根来　尚子　橋本　孝成
服部　仁　浜田　察彦　廣川　和花　福島　理子　福田　安典　正木　ゆみ
真島　望　松原　秀江　宮川　真弥　宮本祐規子　盛田　帝子　矢田真依子
山崎　淳　山中　晋也　山本　和明　米谷　隆史　筱田　将樹　鷲原　知良

上方文藝研究　第十号

平成二十五（二〇一三）年六月十七日　発行

編集・発行　上方文藝研究の会

〒五六〇－八五三二
豊中市待兼山町一－五
大阪大学文学研究科日本文学国語学研究室
Tel　〇六－六八五〇－五一一一
kamibun@let.osaka-u.ac.jp

郵便振替　〇〇九二〇－四－一三〇四一〇（上方文藝研究の会）
印刷　株式会社　ケーエスアイ